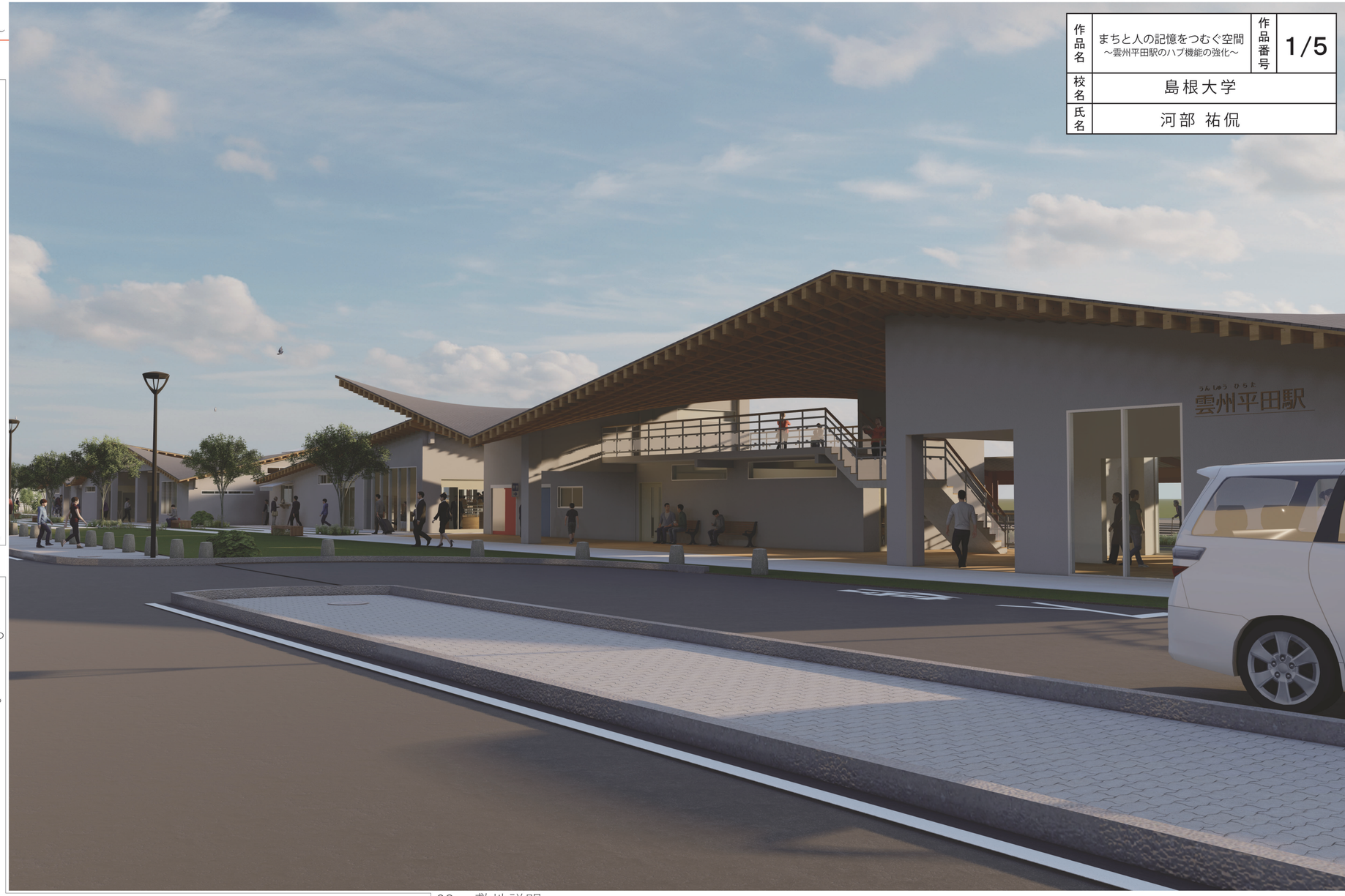
まちと人の記憶をつむぐ空間 ～ 雲州平田駅のハブ機能の強化～

作品名	まちと人の記憶をつむぐ空間 ～雲州平田駅のハブ機能の強化～	作品番号	1/5
校名	島根大学		
氏名	河部 祐侃		



01. はじめに

島根半島をつなぐ一畑電車は、沿線住民にとって大切な存在

↓

利用者はほぼ横ばいで推移

維持していくためには新規利用者層の獲得が必須

↓

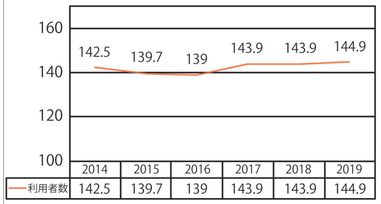
道の駅を付加させ、魅力的な駅空間として

新しい価値を提案

モータリゼーションによって求心力の低下した駅空間を

魅力的な空間として新しい価値提案できるか

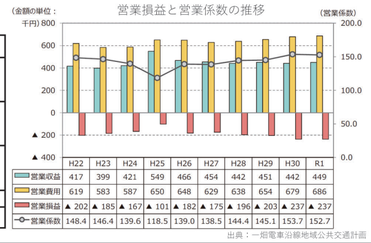
一畑電車年間利用者数推移（万人）



	2014	2015	2016	2017	2018	2019
利用者数	142.5	139.7	139	143.9	143.9	144.9

営業損益と営業係数の推移

（金額の単位：千円）　（営業係数）

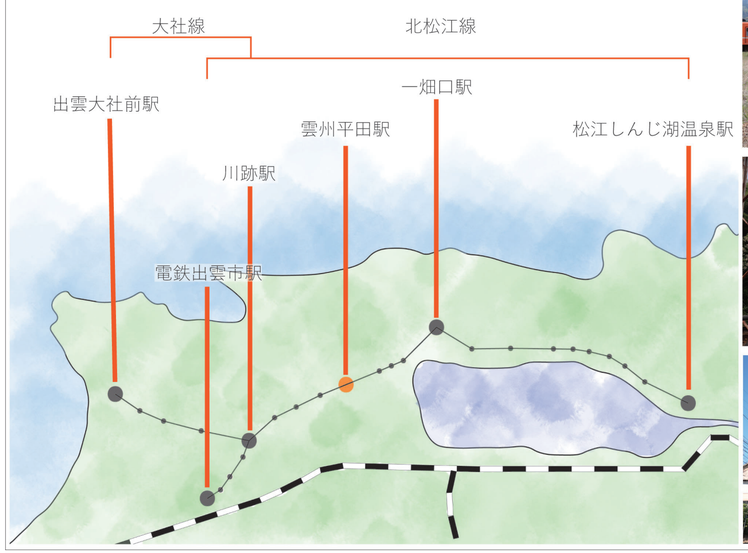


	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1
営業収益	417	399	421	549	466	454	442	451	442	449
営業費用	619	583	587	650	648	629	638	654	679	686
営業損益	▲ 202	▲ 185	▲ 167	▲ 101	▲ 182	▲ 175	▲ 196	▲ 203	▲ 237	▲ 237
営業係数	148.4	146.4	139.6	118.5	139.0	138.5	144.4	145.1	153.7	152.7

出典：一畑電車沿線地域公共交通計画

02. 一畑電車について

- 一畑薬師への参拝客の輸送を目的に大正 4 年に建設された鉄道路線。
- 松江しんじ湖温泉駅から電鉄出雲市駅までの北松江線 33.9km と川跡駅から出雲大社前駅までの大社線 8.3km の合計 42.2 キロの営業区間。
- 松江から出雲への移動など、昔から島根半島の足として地域を支えてきた。
- 宍道湖沿いから出雲平野、市街地の狭い路地など細やかに変わるレトロな風景の中を走るため、ファンが多くいる。
- 概ね年間 4 ～ 5 億円台の売上に対して費用が 5 ～ 6 億円台となっており営業損益は各年度 1 ～ 2 億円台の赤字となっている。
- 年間利用者数推移は、140 万人程度で推移している。目標は年間利用者数 150 万人
- 国や県、松江市、出雲市から支援事業計画を受けて運行を維持している。



03. 敷地説明

対象地

島根県出雲市　平田地区

人口(2021 年)

6,645 人

高齢化率

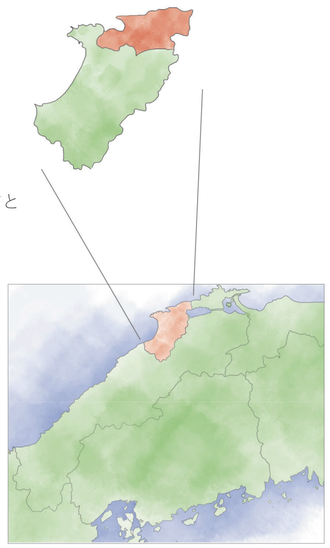
33.64(65 歳以上)

概略

出雲市の東部に位置し、松江市と出雲市の中間地点にあるまち。賑やかな町と自然が融合されたのどかな場所。

宍道湖の西端に面しており宍道湖へと続く川が多く通っている。

島根半島の北側と出雲市街地をつなぐ道と、松江と出雲を繋ぐ道の交差する位置にあるまち。



雲州平田　木綿街道

1300 年代前期には、近江商人らによって開拓された商人のまち。

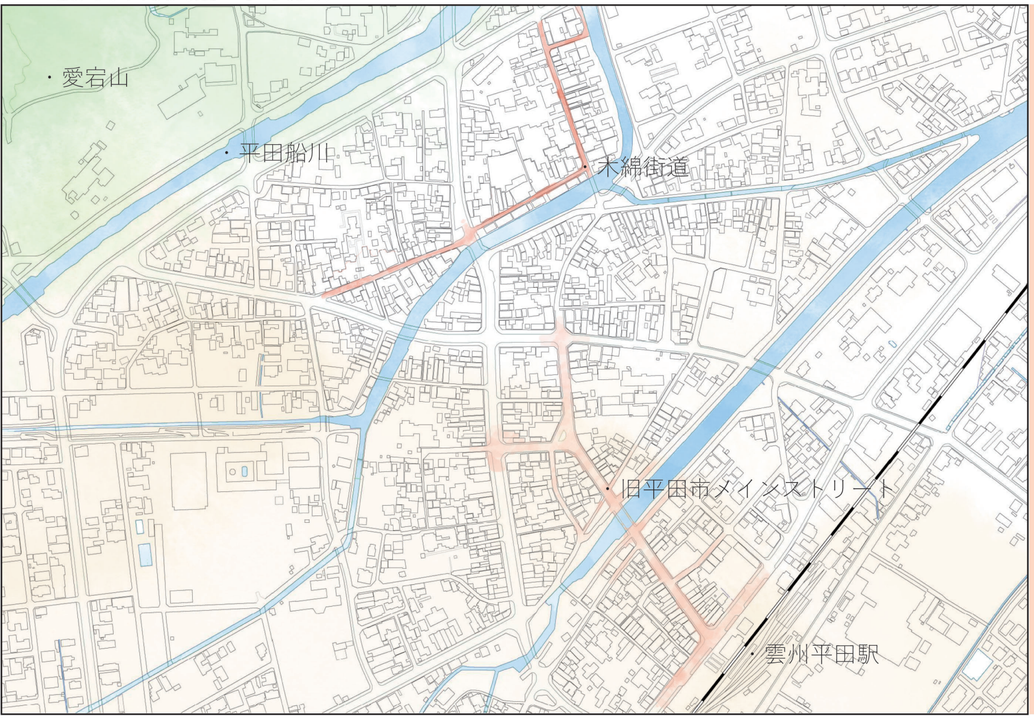
雲州平田木綿の集積地として賑わった。

切妻妻入りの漆喰仕上げで、二階まであるなまこ壁が特徴的な建物が並んだ街道。

1650 年頃に、中国大陸から大量の綿の種が入り、西日本から全国へ派生。1700 年代に入ると綿栽培の爆発的に広がり、1898 年まで活発な取引きがあった。

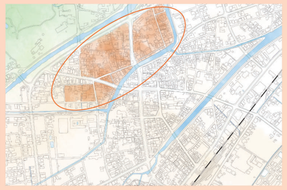
作品名	まちと人の記憶をつむぐ空間 ～雲州平田駅のハブ機能の強化～	作品番号	2/5
校名	島根大学		
氏名	河部 祐侃		

04. 雲州平田駅周辺のまち分析



Phase 1

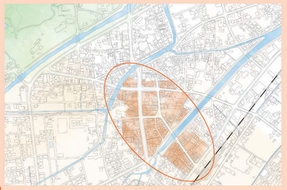
出典：写真は語る昭和の平田 / 田中久雄著



昔は、大阪で声価を得ていた雲州平田木綿の輸送や
松江～出雲間の人の移動などには船で移動する「水運」が
主流だった。
平田船川がまちの中心で、川沿いに蔵や建物が並んでいた。
生活の水場も川と共にあり、カケダシと呼ばれる空間を通して、川を介してコミュニティが
形成されていた。

Phase 2

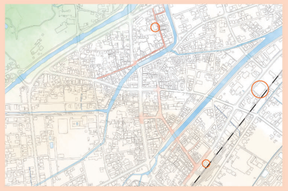
出典：写真は語る昭和の平田 / 田中久雄著



大正 3 年 (1914 年)、一畑軽便鉄道が出雲今市駅から雲州平田駅間で開業したことをきっかけに
交通手段が「水運」から「鉄道」に変わった。
翌年の大正 4 年に雲州平田駅から一畑駅まで延伸され、さらに鉄道が移動手段の主流になった。
これに伴い、まちの中心も南下し、一畑軽便鉄道沿線に移動していく。

Phase 3

出典：写真は語る昭和の平田 / 田中久雄著



車社会への移行に伴い、少しずつ交通手段が「鉄道」から「自動車」に変わった。
バイパスや自動車道の完成により、松江や出雲などの中心市街地への移動が楽になり
通過交通が増えた。
これに伴い、まちの中心が道路沿いに広範囲に薄く広がって、活気が失われた。

05. 周辺地域サーベイ

・木綿街道

・路地裏

・木綿と軒先

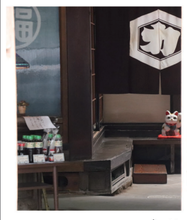
・川

・踏切

・裏道

・カケダシへと続く道

・小道



・店先

・駅前通り

・既存駅舎前

・夕焼けと稜線

・まちかど

・中庭

・なまこ壁

・倉庫

06. 交通計画

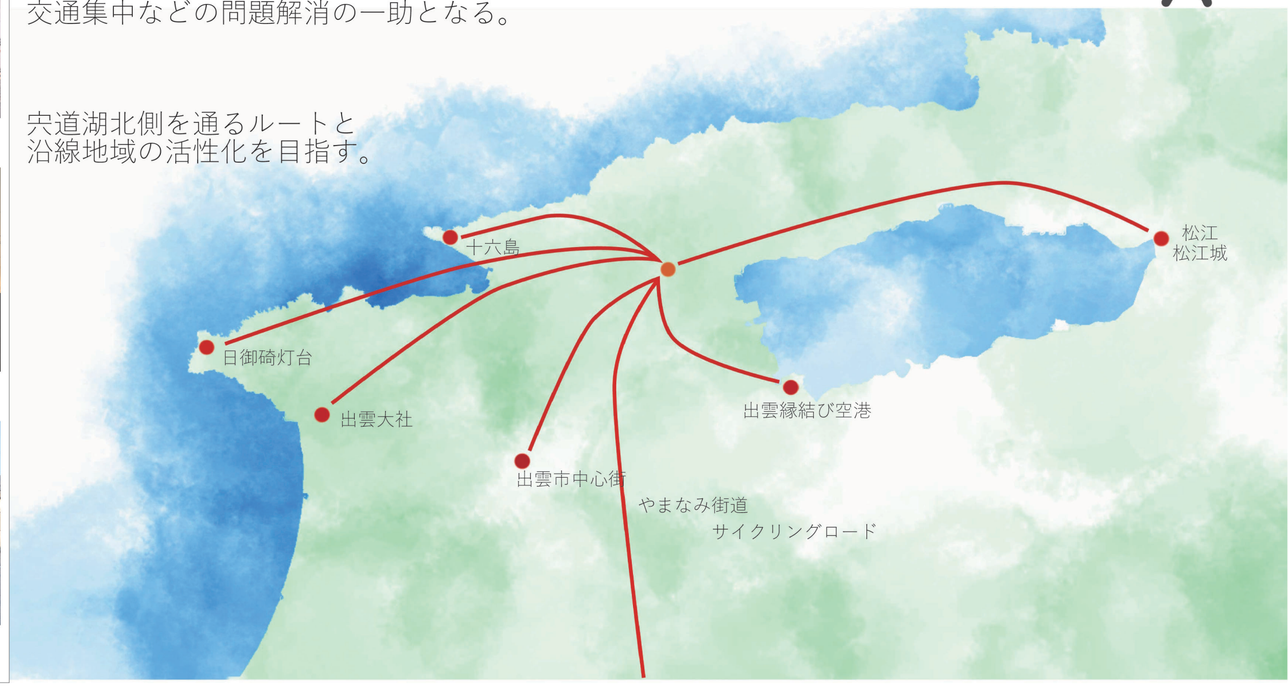
ハブ機能を強化したことにより、今まで交わることが少なかった鉄道利用者と自動車利用者
がつながる。

空港連絡バスを利用している観光客や出雲～松江間を移動する観光客と地域住民が交わる空間となる。

やまなみ街道サイクリングロードを利用しているサイクリストが立ち寄るサイクルスポットとなる。

宍道湖南側を通る国道 9 号のルートが
現在は主流。
交通集中などの問題解消の一助となる。

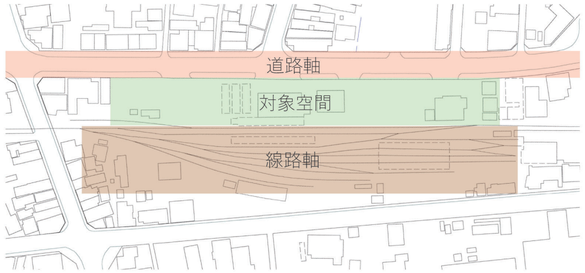
宍道湖北側を通るルートと
沿線地域の活性化を目指す。

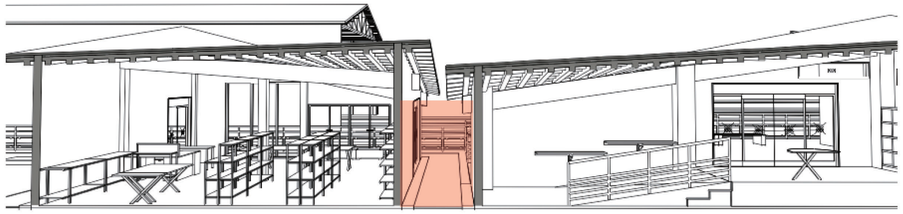


作品名	まちと人の記憶をつむぐ空間 ～雲州平田駅のハブ機能の強化～	作品番号	3/5
校名	島根大学		
氏名	河部 祐侃		

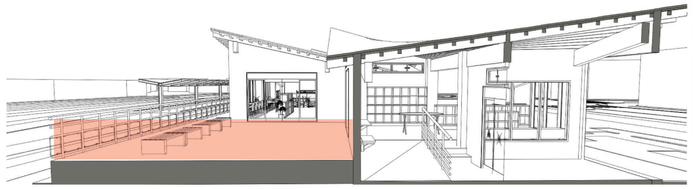
07. ダイアグラム

リニアな敷地空間を活かし、道路軸と線路軸、人とまちを繋ぎ
記憶をつむぎ、一畑電車の魅力を感じられる空間へ



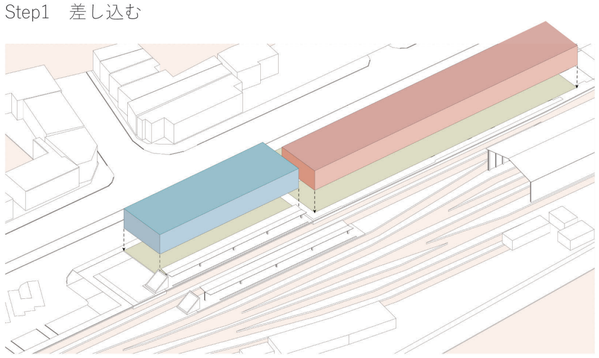


棟間の軒先で景色を切り取り視線を引き付ける。
音や風、視覚で日常と共にある一畑電車を感じる。

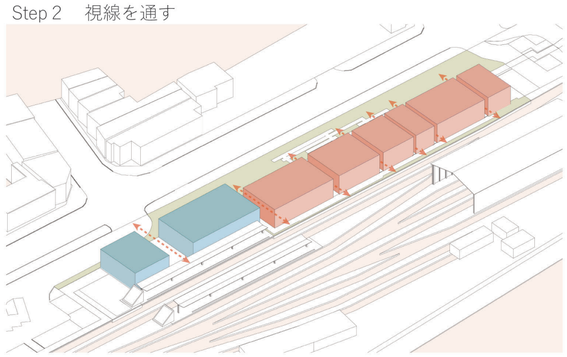


南向き、線路側にデッキを作り、緩やかに人を引き込む。

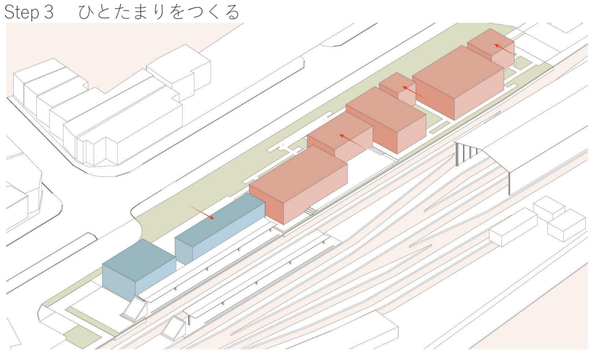
Step1　差し込む



Step 2　視線を通す



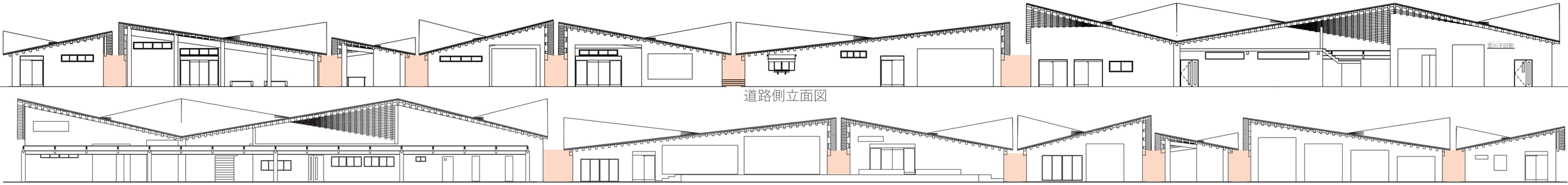
Step 3　ひとたまりをつくる



Step 4　まちを取り込む

08. ファサード計画

木造 HP シェルによる波打った連続屋根によって、全体の一体感と棟間の視線の切り取りを目指した。　棟間を見え隠れしながら走る一畑電車をみて、生活と共にある一畑電車の存在に気づくことができる空間となっている。



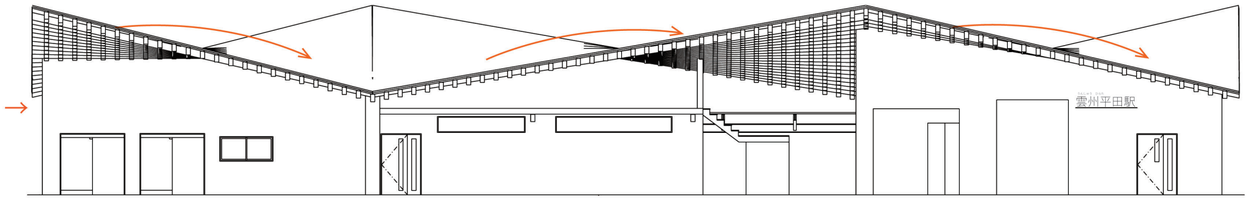
道路側立面図

線路側立面図

平田地区のファサードの変遷

Phase1　切妻屋根（妻入り）

Phase2　陸屋根（平入り）



Phase3(提案）　木造 HP シェル屋根・・・駅舎は 3 枚の HP シェルを組み合わせたもの

デザインソース

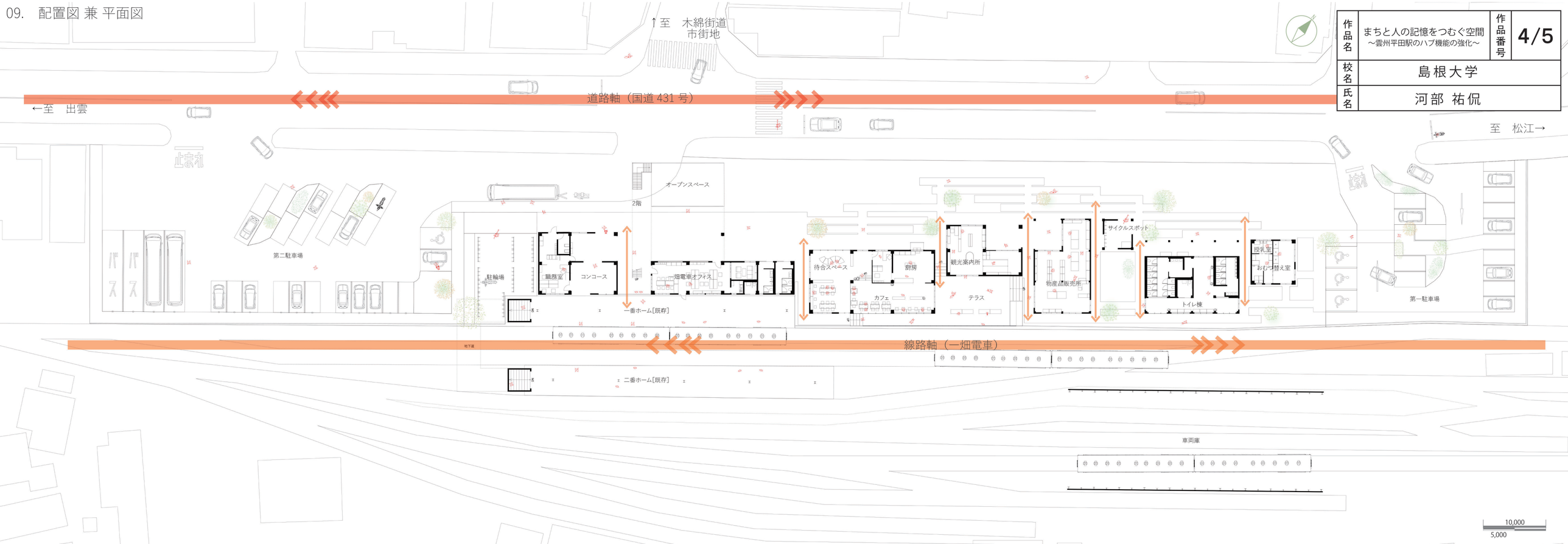
カケダシへと続く道

山の稜線

川

作品名	まちと人の記憶をつむぐ空間 ～雲州平田駅のハブ機能の強化～	作品番号	4/5
校名	島根大学		
氏名	河部 祐侃		

09. 配置図 兼 平面図



10. 詳細説明

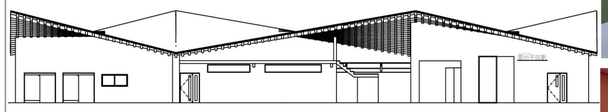
雲州平田駅 駅舎

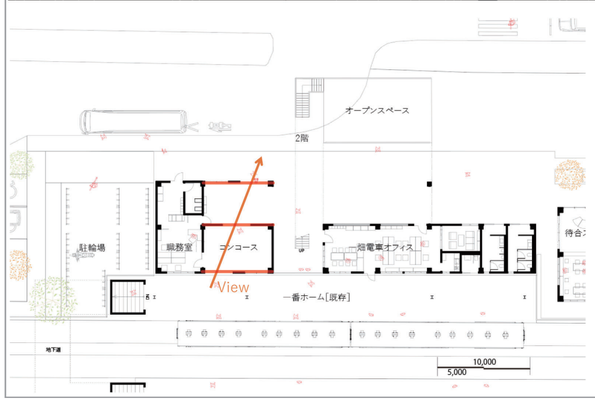
コンコースから道の駅やメインストリートへの視線軸

ゆるやかにまちや道の駅につなぎ歩きたくなる空間

公共性・開放感の高い空間

３枚の木造 HP シェルの屋根
コンコースから、メインストリートへの視線軸
開放感、公共性の高い空間





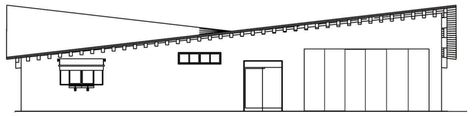
道の駅
（待合カフェスペース棟）

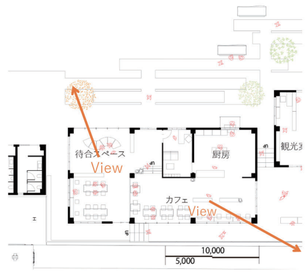
鉄道、バスの待ち時間にくつろぎ談笑する

学生の勉強や通勤前のコーヒーなどを買う

高く上がった軒先により

バス停と一畑車両基地に視線を誘導する





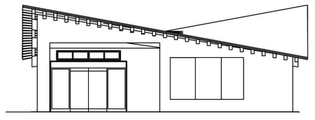
作品名	まちと人の記憶をつむぐ空間 ～雲州平田駅のハブ機能の強化～	作品番号	5/5
校名	島根大学		
氏名	河部 祐侃		

道の駅
（観光案内所棟）

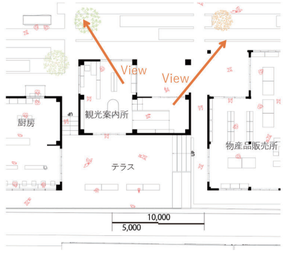
自動車、鉄道のどちらの利用者も使いやすい

中間地点に配置

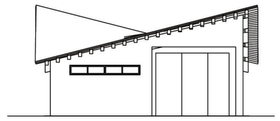
ピロティと軒先で大きくまちに開いている空間



大きなテラスによって
鉄道利用者の興味を引き、目印として誘導する



道の駅
（物産販売所棟）

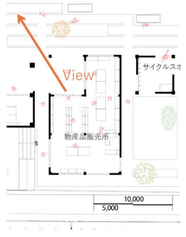


広場での朝市やマルシェと

連携できる大きなピロティ空間のある

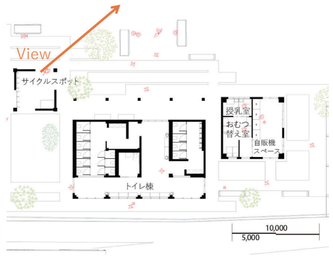
地域特産品など販売する棟

高く上がった軒先により
メインストリートとのつながりを誘導する



道の駅
（サイクルスポット・トイレ棟・自販機棟）

ドライバーやサイクリストが一息つく空間のため
動線を縦横に通した明るく開放的な空間



縦横に通した動線により観光案内所や物産販売所への
人の流れを生み出す

11.　将来像

今まで交わる鉄道利用者、自動車利用者、サイクリスト、空港利用者がつながる。

地域住民の生活に溶け込み、観光客との交流の場になる。

宍道湖北側を通るルートと沿線地域の活性化を促す空間となる。